



子どもに任せること

13日は、もり組の子どもたちが劇遊びを披露する「こども会」です。今年の劇は、もり組の大好きな絵本「どろぼうがっこう」かこさとし作・絵（偕成社）のお話です。ふくろ幼稚園の劇遊びは、決まった台詞を覚えさせるのではなく、お話の世界を思い巡らせながら、子どもたちと一緒に創り上げていきます。子どもたちは、日頃の遊びでも、「どろぼうがっこう」に登場する役になりきって遊んでいました。相手の言葉に応じて、その場にふさわしいと思う言葉を瞬時に考え、返していくやり取りから、毎日少しずつ変化しながら劇の流れができあがっていきました。つまり、台本が先にあるのではなく、子どもたちが、役になってみて気付く言葉や、こうしてみたら面白いかもしれないと考えた動きで構成されているのです。自分以外の何かになりきることは、「きっとこんな風に動くかな。」「こんなことを言うかな。」と、想像力を膨らませる必要があります。

担任は、子どもたちの楽しんでいるところを探りながら、構成や展開を考えていきました。時には、「この場面どうしたい？」「任せるから考えてみてね。」と伝えていたこともありました。そして、誰かのつぶやきを、自分からみんなの前で発言できるように促していました。子どもたちは、友達の考えをよく聞いて、「それいい考えだね。」と認める場面もありました。一つの考えを聞いて、さらに違う考えを思い浮かべるといふ思考の循環が見られるように、子ども同士の育ち合いを引き出していくことを大切にしてきました。きっと、そのやり取りの中で、子どもたちは、小さな考えも形になっていく楽しさを感じたことと思います。

子どもたちに、この劇の楽しいと思うところを聞いてみると、友達の表現している場面をあげる子が何人もいました。泥棒が「前から出てくると思ったら、後ろ（骸骨島の洞窟にしたホールの倉庫）から出てくるところ。」「いないと思っているカーテンとか、ドアとかから出てくるところ。」「警察官があっちもこっちも異常なして言うところ。」など、大きな紙が埋まるほど、たくさんの楽しみがあげられました。担任は、その場面で活躍する一人一人に、「そこは、任せたよ。」と伝えていきました。これまで、積み上げてきたことが確かな自信となる今、声をかけられた子どもたちは、クラスみんなの楽しさにつながることを感じながら一生懸命に取り組むことと思います。

分かりやすい一歩先の目当てを示して「任せる」という言葉をかけることは、子どもの思考力や自立心が育つきっかけとなることでしょう。「任せる」と声をかけたことの根底には、子どもたちの力を信じる気持ちがあります。ご家庭でも、お手伝いや夕食のメニュー決め、翌日の身支度など、「任せるね」と声をかけながら、子どもが考えたり、役割を意識して取り組んだりできる場面を増やしていくとよいですね。

まねる＝学ぶ！こりす組

こりす組の子どもたちは、もり組の劇を見た後すぐに、「どろぼうがっこう」の警察になって遊び始めました。ピストルの作り方を、見よう見まねで再現し、「怪しい人はいませんでしたか？」という台詞まで覚えて、職員室にパトロールに来た子もいました。楽しいことをすぐに吸収する力は素晴らしいと感じます。

「黒い服着てこよう。」「私も持っている。」などと、どろぼう役を着ていた黒い服は、ごっこ遊びに必要なだと考えている子もいます。同じ物を見ても、感じ取る中身がそれぞれ違って、見ているとこちらまでわくわくしてきます。

さて、こりす組は、今「てぶくろ」の劇遊びを楽しんでいます。動物になりきっている姿は、とてもかわいらしく、自分で考えた動き方がそれぞれに違って素敵です。こりす組の劇遊びは、とにかく自分なりの動き方で、なりきって動くことと楽しいと感じることを大切に進めています。一人何役もしたい気持ちがあるので、今登場したと思ったら、すぐに次の役になって出ていたこともありました。

19日は、こりす組のこども会です。これまで、表現遊びを十分に楽しんできたこりす組。もり組に劇を見せてもらったことで、自分たちも誰かに見てもらいたいという気持ちを膨らませていくことでしょう。役で出ているときだけでなく、待っている姿、友達に関心を向ける姿など、これまで学んだ「生活の発表会」です。たくさんの学びを見付けられる日になりますように。